

# 日本国内の西アジア系博物館における体験展示： 体験展示とハンズ・オン展示の分類案から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/31447">http://hdl.handle.net/2297/31447</a>

## 日本国内の西アジア系博物館における体験展示

### —体験展示とハンズ・オン展示の分類案から—

足立拓朗（金沢大学歴史言語文化学系）

四角隆二（岡山市立オリエント美術館）

#### 1. はじめに

近年、様々な体験展示が博物館で実施されるようになった。触ったり、使ったり、作ったりする行動を伴う体験型展示は、展示ケース内の資料を見るだけの従来の展示より、記憶に残り、理解の度合いも高まる。この体験展示の位置づけについては、多くの研究がなされてきたが、その分類方法は一定ではなかった。本稿では、これまでの体験型展示の研究を概観し、新しい分類案を提示する。そして、日本国内の西アジア系博物館における体験展示を報告する。そして、それらの取り組みについて若干の分析を行うとともに、西アジア系博物館における体験展示について今後の展望を行いたい。

#### 2. 体験展示の研究略史とその分類案

体験展示は日本国内で様々な取り組みがなされてきたが、体験型展示や参加体験型展示とも称されることがあり、用語の統一性がとれていなかった。またハンズ・オン展示やインタラクティブ展示といった用語も存在し、一層混乱している。本節では、体験展示、ハンズ・オン展示、インタラクティブ展示についての日本国内での解説を年代順に紹介した上で、それらの分類案を提示する。

まず、新井重三は『博物館講座』第7巻（雄山閣出版）において、体験展示を「体験を通して感受したり理解して貰う展示」と説明した。新井は、特に触覚と聴覚による体験に注目していたようだ（新井 1981）。

染川香澄と吹田恭子は欧米の子ども博物館を紹介し、その中で「ハンズ・オン」が取り入れられていることを示した（1996）。そして「ハンズ・オン」は、ただ見るだけでなく、さわって、ためして、からだ中で遊べるようになっている、と述べた（染川・吹田

1999: 2）。染川・吹田の紹介するハンズ・オンの展示には、暮らし体験や職業体験、自然体験、美術体験など様々な博物館内の体験展示が紹介されている。染川・吹田の紹介したハンズ・オン展示は体験展示とほぼ同義語と考えられよう。

高安礼士は博物館の展示形態を「宝物展示」「実物展示」「ハンズ・オン展示」「環境・社会展示」に分類した。そしてハンズ・オン展示は、サイエンス・センターで行われる実験装置やアミューズメント装置を使ったものであり、参加あるいは体験する展示であると示した（高安 1997: 表1）。高安はハンズ・オン展示＝体験展示と明確には述べていない。ハンズ・オン展示を何かを製作する展示とも見なしていたようだ。

石黒敦彦は、その著書『体験型おもしろミュージアム』（石黒 1999）で約30館の体験型博物館を紹介した。しかし、石黒はミュージアムを博物館、美術館、そして様々な文化施設を含めた概念として使用しているため、注意が必要である。石黒による体験型ミュージアムの分類は、(1) 科学館、美術館、子ども館、(2) マルチメディアの施設、(3) 新しい公園、屋外施設、(4) 町づくり、郷土史系、(5) 環境教育系、となっている。石黒分類は科学館以外の施設を体験型に分類しており、サイエンス・センターを対象としていた高安の考え方と異なっている点が注目される。

青木豊は『新版博物館講座』（雄山閣出版）で、前述の新井の考え方（『博物館講座』雄山閣出版）を紹介し、体験展示とは触覚や聴覚に訴える展示とし、具体例として「磨石や石皿による堅果類の粉碎」「機織り」「シュミレーション映像」「人力による発電などの科学原理に関する展示」「氷点下を体験させる展示」を挙げた。様々な分野の展示を体験展示に分類していることから石黒の分類案に近い考え方と言えよう。

また、青木は体験展示とは別に知的参加を目的とした展示手法として、新たに参加型展示を定義した。そして、参加型展示に、クイズ形式の展示やミュージアム・ワークシート、ミュージアム・ショップを挙げた(青木 2000: 40)。そして、体験展示と参加型展示を「能動態展示」とし、従来の見るだけの展示を「受動態展示」として分類した(青木 2000: 38)。

T. コールトン (Caulton) は、ハンズ・オンをハンズ・オフの逆の展示方法として解説している(2000)。ハンズ・オフとは展示ケースに資料を設置し、来館者が資料を触ることはできず、ただ見るだけとなる展示方法であり、つまり一般的な展示であり、青木の述べた受動態展示にあたる。そして、コールトンは、ハンズ・オンと同類の用語としてインタラクティブを紹介している。両者とも展示装置の存在を想定している用語であり、コールトンはハンズ・オン系展示装置、インタラクティブ系展示装置という用語も使用している。コールトンの展示装置とはボタンを押して動作させる機械のことを指している。そして、ただボタンを押すだけでは「ハンズ・オン展示」とどまると述べ、博物館はその装置を操作することで、利用者の能動的な心の動きを誘発させる「マインズ・オン展示」を目標とすべきと述べている(コールトン 2000: 5)。コールトンのハンズ・オン展示とは、資料そのものを触ったり、使ったりするのではなく、何らかの装置を動かすことであり、科学館型の体験展示を指しているようだ。

K. マックリー (McLean) は、博物館の世界では、インタラクティブ、参加型、ハンズ・オンが互換性を持って用いられており、混乱を招いていると指摘している(マックリー 2003: 128)。そして、それぞれ次のように説明している。(1) ハンズ・オン：何かに手を触れること、(2) インタラクティブ：利用者と展示に相互関係が生じること、(3) 参加型：利用者が何らかの形で展示環境に参加すること(マックリー 2003: 129)。

マックリーの説明では、コールトンが紹介するような展示装置は登場しない。マックリーは、ハンズ・オン、参加型、インタラクティブをフリップ・ラベル(めくり型ラベル)で説明している。フリップ・ラベルは「めくる」という動作が伴うため、ハンズ・オンである。複数のフリップ・ラベルで展示が構成されれば、全てをめくるために展示に「参加」しなくて

はならず、参加型の展示となる。しかし、ラベルそのものの完成度が高くなければ、インタラクティブとは言えない。インタラクティブとは利用者をより活動的にさせ、動機付け、熟考させる内容を持つ展示である。そして、ラベルの内容は来館者の年齢、興味対象の違いによって使い分けられなければならないと説明した(マックリー 2003: 129)。

森本浩子はハンズ・オンと言われている体験型展示はボストン子ども博物館で生まれ、世界に広がっていた、と述べた<sup>(1)</sup>(2004: 127)。前記の染川・吹田もボストン子ども博物館を紹介していたが、あくまでハンズ・オンという用語を使用していた。森本はハンズ・オン=体験型展示と明確に指摘していることが注目される。

鶴崎愛と牧正興はボストン子ども博物館でハンズ・オンが生まれたことについてさらに詳しく述べている。それによると、1962年に館長のM. スポック(Spock)が従来の「さわらないで！(Do not touch)」という掲示を取り外し、展示品をガラスケースの外に出し、「さわってね(Hands-on)」と書いたのが始まりだと述べた。そして、鶴崎と牧は、ハンズ・オンが従来の鑑賞方法に触覚を加えることにより能動的な性格を付与されたものであると示唆した(2007: 12)。ハンズ・オン展示の用語としての意味がかなり広くとらえられている現状を整理するために、その最初期の状況からその特徴を捉えた意見として重要である。

さて、体験展示とハンズ・オン展示は同じものと言えるのだろうか。森本のようにハンズ・オン展示=体験展示と見なす意見もあるが、マックリーと鶴崎・牧が指摘したようにハンズ・オン展示は当初は触覚を重視した展示手法であった。すなわち、ハンズ・オン展示は狭義の意味において、触覚型の体験展示と見なすことができるだろう。体験展示には、これに加えて、聞いたり、臭いをかいだり、何かを試したり、作ったりする様々な行動が存在する。そのため、このような展示手法は行動型の体験展示とみなせるだろう。またコールトンが指摘するような科学館で実施される装置を介させた体験展示も存在する。これは装置型の体験展示と呼ぶことができるだろう。

以上をまとめると次のように表せる。

体験展示（広義のハンズ・オン展示）

触覚型体験展示（狭義のハンズ・オン展示）

行動型体験展示

装置型体験展示

このように、広い意味では体験展示とハンズ・オン展示は同義語とあって良いだろう。最初は単に触ってみる展示として始まった「ハンズ・オン展示」が様々な体験的な展示を含む用語となっていくと言えよう。その意味では、日本語の体験展示という用語のほうが現実に即しているのかもしれない。注意しなくてはならないのは、ハンズ・オン展示といった時は、狭義の触覚型体験展示のみを示す意味もありえる、ということであろう。また分類の中で、行動型体験展示はさらに細分が可能と考えられる。次節では、この分類案に沿って日本国内の西アジア系博物館の体験型展示を分析していく。

### 3. 日本における西アジア系博物館での体験展示

#### (1) 古代オリエント博物館

東京都豊島区東池袋のサンシャインシティ内に位置する古代オリエント博物館は1978年に開館した登録博物館である。サンシャインシティは、水族館や劇場、アトラクション施設、展望台、ショッピング・モールを有する商業・アミューズメント・文化の複合施設である。同館はこの複合施設の一部として、古代オリエントの考古学資料、美術・工芸品の常設展示を実施しながら、オリエント関連を中心とした特別展を開催している。

古代オリエント博物館が実施した体験展示は、1987年の企画展示「中国歴代女性像展」で、シルクロードに咲く花の香りを会場の一部に流したことに始まる。これは行動型体験展示の一種と言えるだろう。

その後、1989年には「アミュレット展」が開催され、アミュレットを粘土で作る製作体験が実施された。これも行動型体験展示である。古代オリエント博物館では、これ以降も粘土製作の行動型体験展示が多く行われており、同館の特徴的な体験展示となっている。

1990年には、「エジプト—王朝文明のルーツを探る—」展が開催され、粘土製作の体験展示が行われた。エジプトのアミュレット、神像、カバ像が製作された。

1991年の「印章の世界展」でも粘土製作体験が行

われた。レプリカの円筒印章を粘土に転がす体験であった。

1994年度には特別展「古代オリエントからのメッセージ—暮らしの考古学展—」が実施された。その中で新たな行動型体験展示が企画された。それは、「古代ビールの試飲会」である。また同展では粘土製作体験の「コインの製作教室」も行われた（古代オリエント博物館1995:28）。

古代オリエント博物館では、粘土製作体験を軸にして、新たな企画を導入しながら体験展示を継続させている。

1998年の「古代ペルシア展」、「シルクロードに栄えた工芸と王朝文化」展でも粘土によるコイン製作体験が実施された。

1999年には「香りの世界展」が開催された。この特別展内で、花々のエキスやクレオパトラの香りが再現され、嗅覚の体験展示が実施された（古代オリエント博物館1999:29）。同年に、「作ってみよう—古代エジプトのアミュレット（お守り）」が夏休み向け体験展示として行われた（古代オリエント博物館2000:29）。

2001年には、「古代ガラスの技と美：現代作家による挑戦展」で、粘土によってモザイクガラス技術を復元したアクセサリー製作体験が行われた。これも古代オリエント博物館が得意とする粘土製作の体験展示である。

2002年度には「タイムスリップ！ファラオの世界展」が開催され、古代エジプトのファラオや神の冠をかぶる衣装体験、クレオパトラが愛した香り体験、古代エジプト護符作りが実施された（津村2003:28-29）。また、壁面に磁石付のジグソーパズルを設置して、来館者に解いてもらうコーナーを設置している。このジグソーパズルは現在も常設展示に使用されている。

2003年の「神々と王の饗宴：アンコール・ワット拓本展」では、シリアの土器資料の拓本を作る体験が催された。

2004年には「古代モンスターワールドへようこそ」展が開催され、衣装体験の「モンスターになってみよう」、粘土製作体験の「オリジナルのモンスターマグネットを作ろう」が実施された。

2005年の「あなたも名探偵・シリア発掘の現場から」展では、これまでに実施された、粘土によるコイ



ン製作体験、シリアの土器資料の拓本製作体験、シリアの民族衣装体験が実施された。

2006年の夏の特別企画展は「おもしろ体験博物館」展であり、その名の通り体験展示がメインの展示となった。本展示では、古代オリエント博物館がこれまでに実施してきた、冠をかぶる衣装体験や粘土を使ったスタンプ印章製作体験の他に、新規の取り組みとして、「エジプトのヒログリフで名前を書こう」、「メソポタミアの楔形文字で名前を書こう」、「中近東の民族使用を着てみよう」、「石皿で麦を粉にしてみよう」、が実施された（古代オリエント博物館 2006: 25）。

2007年春には、「シルクロードへの誘いー青い煌めきウズベキスタン展」が開催され、ウズベキスタンの民族衣装を着る体験展示が行われた。

2007年夏には、体験展示主体の特別展示「博物館へ行こう！」展が開催されている。「エジプトのヒエログリフで名前を書こう」、「石皿で麦を粉にしてみよう」が実施された。その他、「あなたも変身！古代の王になってみよう」、「古代オリエントのコインを作ろう」なども行われている（古代オリエント博物館 2007: 21）。

2009年春には、「春休み体験 ファラオになろう！」展が開催されている。ここでは、2006、2007年度に行われた、「古代エジプトのファラオに変身！」に加えて、古代メソポタミアの王や王妃への変身が衣装体験のレパトリーに加わっている。また、「ヒエログリフや楔形文字で自分の名前を書こう！」、「動物の土偶作り教室」も開かれている（古代オリエント博物館 2009:30）。

2009年秋には「ドキドキ土器って面白い！世界の土器の始まりと造形」展で、「土器を復元してみよう」が実施された。これは土器片を接合する体験展示である。

2010年には「地中海古代クルーズ」展が開催された。この展示では、「古代ギリシア人に変身！」コーナーが設けられた。古代オリエント博物館の得意分野の一つである衣装体験展示である（津本 2010: 17）。

以上のように、古代オリエント博物館における体験展示は、行動型体験展示が殆どである。そして、ほぼ毎年、新たな行動型体験展示を企画しており、粘土製作体験と衣装体験を軸にしたヴァラエティに富んだ体験展示のレパトリーを有している。2007年からは

行動型体験展示が特別展示の中心になっているほど、同館の展示手法に主体的に利用されていることがわかる。

## (2) 岡山市立オリエント美術館

古代オリエント博物館に一年遅れて 1979 年に開館したオリエントの美術・工芸品を扱う市立の登録博物館である。古代オリエント博物館と比べるとイスラーム期の資料が比較的多くなっているのが特徴である。岡山城、後楽園、岡山県立博物館に隣接しており、岡山市の文化施設群の中核に立地している。

この岡山市立オリエント美術館は、古代オリエント博物館に 1 年遅れて体験展示に取り組み始めた。行動型体験展示が主であった古代オリエント博物館とは異なり、岡山市立オリエント美術館では 1988 年から触覚型体験展示を実施している。これは石器や土器の破片を標本として設置し、来館者に触れてもらう体験展示である。この触覚型体験展示は、2001 年まで継続されている<sup>(2)</sup>。

行動型体験展示は、2002 年の「古代イラン秘宝展」の衣装体験から実施されている。これは、事前のイラン調査で民族衣装を収集し、実現したものである。同じく 2002 年の「シルクロードの響き」では中近東の民族楽器を使用した行動型体験展示が行われた。楽器を触るだけなら、触覚型となるが、ここでは楽器を使用して音を出すことができ、行動型体験展示と言える。

2004 年には、「まねるーイスラーム陶器と中国陶磁器ー」展が開催され、陶器・陶磁器片を触るコーナーが設けられた（図 1）。これは、同館が 1988 ～ 2001 年まで実施してきた触覚型体験展示を再開したと言える。

2005 年には、同館の屋上を利用したエンマー小麦の栽培体験が始まり（図 2）、現在まで継続されている。これは基本的には職員による栽培実験であるが、友の会会員や職場体験の中学生も栽培に参加している（四角 2007）。

この取り組みで重要なのは、栽培だけでなく、粉擦り・製粉体験を西アジアの先史時代に使用されたサドル・カーン（鞍形磨臼）を復元して作業していること、そして、小麦粉を調理してパンを食べるまでの工程を体験展示として提示していることである。多くの工程はワークショップ（体験学習講座）として実施してい

る。これらの過程を友の会の会誌で告知しながら進めており、友の会の会員にとって非常に魅力的なイベントになっている。

2006年度以降は、従来の陶器片の触覚型体験展示、民族衣装を試着する行動型体験展示のほか、新たにヒエログリフを書く行動型体験展示を継続的に実施している。

そして、2007年からIBM社の「遙かなるエジプト」情報ステーションが設置された。これは、エジプトの発掘を体験するビデオゲームの一種であり、本稿分類の装置型体験展示と言える。この「遙かなるエジプト」は現在でも継続的に同館に設置されている(図3)。

岡山市立オリエント美術館では、触覚型体験展示、行動型体験展示、操作型体験展示という全ての体験展示を実施していることがわかる。

### (3) 中近東文化センター附属博物館

中近東文化センターは東京都三鷹市に位置する。岡山市立オリエント美術館と同じく1979年に展示室を開館しているが、登録博物館となったのは2005年からである。最寄り駅からバスで10~20分かかるため、公共交通機関を利用したアクセスは良いとは言えない。登録博物館となった2005年度頃から、三鷹市と武蔵野市との連携が深くなり、特に夏休み期間中では、近隣の小中学生の来館を促す企画展を開催するようになった。その際の取り組みで主体となったのが体験展示である。

2005年の企画展示「アラジンと魔法のランプと海のシンドバッド」展では、中近東の民族衣装を着て写真を撮る体験展示が行われた。また、焼き物製作体験の「自分の魔法のランプを作ってみよう」と「楔形文字で自分の名前を書いてみよう」も行われた。

2006年には企画展示「中近東の土偶」展が開催され、衣装体験コーナーが2005年度に引き続いて実施された。また焼き物製作体験の「中近東の土偶を作ってみよう」と「楔形文字と円筒印章を体験しよう」も行われた。

2007年の企画展示「中近東歴史どうぶつ園ールリカとたびのなかまたちー」展でも衣装体験コーナーが設置された。焼き物製作体験も例年通り行われ、「中近東の動物をつくってみよう!」として実施された。



図1 岡山市立オリエント美術館、2004年企画展示「まねるーイスラーム陶器と中国陶磁器」展の触覚型体験展示コーナー



図2 岡山市立オリエント美術館屋上の小麦畑



図3 岡山市立オリエント美術館の常設展示室に設置された「遙かなるエジプト」



図4 中近東文化センター附属博物館、2008年企画展示「中近東文化の植物と生活」展の水タバコ体験コーナー



図5 中近東文化センター附属博物館、2008年企画展示「中近東文化の植物と生活」展のバラ水体験コーナー、学芸員実習生が展示ガイドを務めた。



図6 中近東文化センター附属博物館、常設展示室の小麦製粉体験コーナー

また「くさび形文字と円筒印章を体験しよう！」も開催した。

2005～2007年には、体験展示として衣装体験、イベントとして焼き物製作と楔形文字と円筒印章体験が行われた。衣装体験の種類を増やしたり、製作するやきものの形を変えるなど、アレンジを加えながら実施してきた。

2008年度に行われた企画展示「中近東の植物と生活」展は体験型展示の企画展であった。前述した岡山市立オリエント美術館から指導を受けて導入したコムギの製粉体験の他に、中近東の様々な食材（クスクス、ピスタチオ、なつめやしなど）に触れる体験コーナーを設置した。また、中近東の水タバコを体験したり（図4）、中近東の砂漠で生成される岩石である「砂漠のバラ」をさわる展示（触覚型体験展示）、また香水瓶に入ったバラ水を手にふりかけて、その香りを体験するコーナーも設置した（図5）。そして、中近東原産の植物であるチューリップや代表的な動物であるラクダを折り紙で製作するコーナーも展示室内に設定した。また、「草木染めによるシルクマフラー染体験」、「バラとナツメヤシのお菓子を作ってみよう」、「パピルスで紙を作ってみよう」、「中近東のパンを作ってみよう」、「中近東のゲームを体験しよう」、「アラブのお菓子（カタールイフ）を作ってみよう」、「焼き物作り教室（中近東の花もようを陶器に描いてみよう!）」、「古代文字教室（楔形文字でアルファベットを勉強しよう!）」といった新規と従来の取り組みをあわせて、会期中の週末の多くを体験展示のイベントで構成した（足立 2009a, 2009b）。

続く2009年度は「中近東の星座と神話」を開催している。中近東で伝統的に使用された天体観測儀である「アストロラーベ」のレプリカを操作して、その仕組みを知ることができる体験コーナーが本企画展の目玉となった。例年通り衣装体験コーナーも設置している。前年度、好評だった折り紙コーナーを拡張し、黄道12星座にちなむ動物全ての折り紙を製作できるコーナーを作った。また、「アストロラーベを作ってみよう」、「アラブお菓子調理体験」、「中近東のやきものを作ってみよう」などの体験学習イベントも実施した。

2009年度には、常設展示室の改装を行い、四つの体験展示コーナーを設置した。まず、岡山市立オリエ



ント美術館から技術を導入した小麦製粉体験（図6）、従来体験型のイベントとして実施してきた楔形文字体験のコーナー、円筒印章を粘土に回転押捺する体験コーナー、そして、香辛料体験コーナーである。常設展示の体験展示コーナーには、ボランティア・スタッフが常時待機し、来館者に体験の仕方について解説を行い、理解を助けるようにしている。

2010年の企画展示「シンドバッドの大冒険とガラスの海」展では、香りを嗅ぐタイプの行動型体験展示を積極的に導入した。沈香木・白檀などの香木体験、龍涎香（マッコウクジラの結石から作った香料）体験、バラ・ジャスミン・ナルドの香油体験を企画展示室に設置した。その他に、新たな体験展示として、アラビア文字体験を実施した。また従来の水タバコぶくぶく体験、衣装体験コーナーも設置した。「ペルシア書道教室」、「コーヒー焙煎体験」、「中近東のやきものを作ってみよう」、「楔形文字を体験しよう」、「バラの折り紙を作ってみよう」などのイベントも実施した。

本企画展中に、香り体験コーナーを対象とした来館者アンケート調査を行った。開館期間96日、入館者数9800名のうち164名に回答をいただき、良かった145名（88.4%）、悪かった9名（5.5%）、どちらとも言えない10名（6.1%）の結果が得られた。アンケートの詳細については、中近東文化センター附属博物館のWeb siteで公開している（<http://www.meccj.or.jp/Pages/shindbadankeito.html>）。

## 6. まとめと展望

西アジア系の博物館3館（古代オリエント博物館、岡山市立オリエント美術館）における2010年度までの体験展示の取り組みを概観してきた。3館ともほぼ同時期に開館した博物館であり、考古学者の学芸員が勤務していることなどの多くの共通点がある。ただ、3館の立地は大きく異なっており、その展示手法に相違点が生じることは十分予想される。しかし、体験展示が増加している傾向は一致している。

体験展示は、古代オリエント博物館が最も早く導入し、1987年花の香りを来館者に体験してもらう行動型体験展示を行った。続いて、1988年には、岡山市立オリエント美術館は、触覚型体験展示をスタートさせている。

古代オリエント博物館は、1989年から粘土製作に

よる行動型体験展示を手がけはじめ、現在に至るまで同館の特徴的な催し物として展示技術を確立させている。古代オリエント博物館は、粘土体験だけでも、そのレパートリーは、アミュレット製作、印章製作、コイン製作、アクセサリー製作と多岐にわたっている。

岡山市立オリエント美術館では、従来の触覚型体験展示に加えて、2002年の「古代イラン秘宝展」から行動型体験展示をスタートさせた。

中近東文化センター附属博物館は体験展示導入は2005年の「アラジンと魔法のランプと海のシンドバッド」展からであり、他2館と比べてかなり後発である。

岡山市立オリエント美術館では、2007年からIBM社の「遙かなるエジプト」情報ステーションを設置しており、操作型体験展示も導入し、これにより本稿分類の3種類の体験展示を全て実施していることとなった。

他の2館では、操作型体験展示は設置されていないものの、古代オリエント博物館では2006年の企画展は「おもしろ体験博物館」展で、中近東文化センター附属博物館では2008年の「中近東の植物と生活」展で、体験型主体の企画展示が開催されている。これらの企画展示では、体験展示が目玉（最重視される展示）となっており、主体的に体験展示を展示手法に取り入れていることがわかる。

このように、西アジア系博物館3館では体験展示の占める割合が年々増加してきている。これは西アジアの歴史・文化を日本人に理解してもらうための工夫と言えるだろう。わかりやすい解説パネルを作成することは当然大切なことであるが、体験によって得られる理解は読んで理解することとは違った、わかりやすさと身近さがある。

中近東文化センター附属博物館は2005年度から登録博物館となり、地域の三鷹市・武蔵野市の市民に気軽に利用していただけるよう、一層わかりやすい展示を心がけてきている。中近東文化センターは開館当初は研究志向型博物館の性格が強かったが、近年は地域博物館としての機能を高める活動を増加させている（大津・足立2009）。そのような中で、「中近東」、「西アジア」、「オリエント」、「考古学」、「イスラーム」といった、西アジアの専門家では大前提となるキーワードが一般的には殆ど理解されていないという現実を



日々実感している。近年、中近東文化センター附属博物館は地域博物館を目指しており、専門的な展示から一般向けの平易な展示にシフトしており、西アジアや中近東に興味を持っている来館者より、地域の文化施設としての「癒し」を求める近隣在住の来館者が多くなっている。西アジア、中近東、オリエントにさほど関心がない来館者にとって、予備知識がなくても理解できる体験展示は非常に効果的である。

2010年の「シンドバッドの大冒険とガラスの海」の体験展示のアンケート結果では前述のように88.4%の利用者が満足する結果を得られた。今後も体験展示を対象としたアンケートを実施して、さらに質の高い体験展示を目指していかなければならない。西アジアの文化という日本人にとっての全くの異文化を理解するために、体験展示は非常に有効であり、今後も積極的に利用していく必要がある。

そのためには、岡山市立オリエント美術館で実践しているように、触覚型、行動型、操作型の体験展示を織り交ぜながら、多様な体験展示を構成していくことが肝要であろう。

最後に考古学の観点から西アジア系博物館の体験展示について展望を行いたい。本稿で取り上げた3館には、西アジアにおいて発掘調査に携わっている学芸員が活動しており、西アジア系博物館であると同時に考古学系博物館でもある。考古学系博物館の体験展示について分析することが本稿の目的ではないが、考古学の成果を社会に還元していくパブリック・アーケオロジー（Public Archaeology）については近年盛んに議論されている。そのような中で博物館における体験展示として、欧米で実例が挙げられているのが、発掘そのものを体験する行動型体験展示である（Merriman 2004: 93; Swain 2007: 276）。展示室内で発掘を体験する展示は日本の西アジア系博物館ではまだ実施されていない。西アジアの発掘調査は日本の発掘調査と異なる方法もあり、日本の考古学者にとっても興味深いものになることが予想される。当然、一般の来館者にとっても有意義な体験となるはずである。今後の西アジア系博物館にとっては発掘そのものを体験する行動型体験展示を実施することが期待されるだろう。

#### 謝辞

古代オリエント博物館にはこれまで実施してきた体験展示

について、詳細な資料を提示していただいた。藤井純夫氏には以前担当した体験展示についてご教授いただいた。また須藤寛史氏には画像の提供を受けた。感謝申し上げる。

#### 註

- 1) コールトンによると、ハンズ・オン系博物館の起源は1925年のドイツ博物館（ミュンヘン）に遡ると言う（コールトン 2000:6）。
- 2) 当時、岡山市立オリエント美術館の学芸員だった藤井純夫氏（現金沢大学教授）から、この触覚型体験展示について話を聞くことができた（2010年10月）。実施にあたっては、展示台の上に土器片や石器の平面形をトレースし、来館者が資料を元の位置に戻すためのガイドとした。このような措置を取ることで、資料が紛失したり、展示台から離れることはなかった、ということである。

#### 引用・参考文献

- Merriman, N. 2004 *Involving the Public in Museum Archaeology*. In N. Merriman (ed.) *Public Archaeology*. London, Routledge. 85-108.
- Swain, H. 2007 *An Introduction to Museum Archaeology*. Cambridge, Cambridge University Press.
- 青木 豊 2000 「展示の分類と形態」加藤勇次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司（編）『博物館展示法』新版・博物館学講座第8巻 雄山閣出版 31-73頁。
- 足立拓朗 2000a 「夏休み自由研究ワークシートを活用した博物館利用と博物館連携」『ORIENTE』38号 4-9頁。
- 足立拓朗 2009b 「ワークショップにおける博物館連携の可能性について」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』23巻 26-32頁。
- 新井重三 1981 「展示の形態と分類」『博物館学講座』第7巻 雄山閣出版 25-35頁。
- 石黒敦彦 1999 『体験型おもしろミュージアム』フレーベル館。
- 鶴崎 愛・牧 正興 2007 「チルドレンズ・ミュージアムの意義と役割についての日米比較—hands-on 展示以降の参加体験型ミュージアムにおける、児童文化財の新たな形—」『福岡女学院大学紀要人間関係学部編』8号 11-19頁。
- 大津忠彦・足立拓朗 2009 「中央志向型博物館における地域連携の可能性—中近東文化センター企画展「小説に読む考古学—松本清張文学と中近東—」の地域連携活動—」『筑紫女学院大学・短期大学部 人間文化研究所年報』第20号 39-55頁。
- 楠 房子 2006 「学びと体験をつなげる—展示コンテンツ支援のデザイン—」『画像ラボ』17巻2号 29-31頁。
- 古代オリエント博物館（編）1995 「平成6年度事業報告」『ORIENTE』11号 27-31頁。
- 古代オリエント博物館（編）1999 「平成10年度事業報告」『ORIENTE』19号 26-31頁。
- 古代オリエント博物館（編）2000 「平成11年度事業報告」

- 『ORIENTE』21号 26-29頁。  
古代オリエント博物館(編) 2006「2006夏の特別企画おもしろ体験博物館」『ORIENTE』33号 25頁。  
古代オリエント博物館(編) 2007「2007夏の古代オリエント博物館 特別企画 博物館へ行こう!」『ORIENTE』35号 21頁。  
古代オリエント博物館(編) 2007「平成18(2006)年度事業報告」『ORIENTE』35号 24-31頁。  
古代オリエント博物館(編) 2009「いつもの常設展とはちよっと違う。春休み体験ファラオになろう!」『ORIENTE』38号 30頁。  
古代オリエント博物館(編) 2010「2009年度(平成21年度)事業報告」『ORIENTE』41号 21-30頁。  
コールトン, ティム(著)、染川香澄・芦屋美奈子・井島真知・竹内有里・徳永善昭(訳) 2000『ハンズ・オンとこれからの博物館—インタラクティブ系博物館・科学館に学ぶ理念と経営』東海大学出版会。  
四角隆二 2007「古代オリエント世界を体験する—エンマ—小麦栽培実験プロジェクト」『ラピス』27号 14-15頁。  
島 絵里子 2009「展示解説員から体験交流員へ—知識の伝達から双方向交流への転換」『JMMA』14巻2号 28-31頁。  
高安礼士 1997「博物館展示論」大堀 哲(編)『博物館学教程』東京堂出版 99-128頁。  
津村真輝子 2003「「タイムスリップ!ファラオの世界展」奮闘記」『ORIENTE』26号 28-29頁。  
津本英利 2010「夏の特別展「地中海古代クルーズ」展示こぼれ話」『ORIENTE』41号 16-19頁。  
中村 弘・村上賢治 2009「兵庫県立考古博物館の展示と体験学習活動」『博物館研究』44巻5号 8-10頁。  
マックリー, キャスリーン(著)、井島真知・芦屋美奈子(訳) 2003『博物館をみせる—人々のための展示プランニング—』玉川大学出版部。  
森本浩子 2004「ボストン子ども博物館に見る異文化理解教育」『目白大学短期大学部研究紀要』41号 127-138頁。  
尹 泰九 2009「マインズ-オン型展示を通じたデザインの改善に関する考察—デザイナー・H氏の展示を通して—」『芸術学研究』13号 163-170頁。  
脇田重雄 2007「博物館の活性化を願って」『ORIENTE』34号 22-27頁。